

## まえがき

本書は、広義の平和研究者たちによる、平和を考える人のためのブックガイドである。けれども、「こんな本が面白い」と薦めるだけの、ごく普通のブックガイドではない。「広義の平和研究者」と書いたように、執筆者の専門分野は、国際関係学・政治学・社会学・法学・文化人類学・歴史学・教育学・哲学・経済学・文学…と、きわめて多岐にわたっている。つまり、いずれの研究者も、平和という価値に人並みならぬ関心をもっているが、それぞれが時にまったく異なるアプローチで問題に接近している。目標となるテーマは一つだが、これだけ多岐にわたる分野の執筆者によるブックガイドはあまり例がない。しかしこの事は、本当に「平和を考える」ためには、できるだけ多くの学問分野が協働して事に当たらなければならないということをも意味している。この本が依拠する「平和研究 (Peace Studies)」とは、そういう新しいタイプの学問分野である。本書の第一の特長は、「平和を考える」ための多種多様なアプローチとその協働の可能性を読者に示すことにある。

しかしそもそも、平和という漠然とした価値について、何を何からどのように考えてゆけばいいのか、それ自体が難問である。平和は健康に例えられる事が多いが、健康の定義についてよく考えるとその輪郭がぼやけてしまうように、平和もまた実際には捉えどころのない概念である。ただ、私たちが病気になってはじめて健康の意味を理解するように、平和がもつ本当の意味は、それを破壊する戦争や暴力の経験から鮮明に浮かび上がってくるだろう。つまり、「平和を考える」ためには、まずは平和とは反対の戦争や暴力の現実について、じっくりと考えることから始める必要がある。

本書の二つ目の特長は、このような平和の思考の出発点や道筋を読者に提供することにある。本書では、「暴力」についての根源的な考察からはじまって、戦争や暴力をこれから人類がどのように克服していけるのかを構想するまで、14のサブテーマを設定した。もちろん、これらはいずれも便宜的なものであり、読者は興味をもったところから自由に読み進めていただければと思う。いうま

でもなく、あるテキストをどのような文脈で読むかは、読者の自由にゆだねられており、またそれこそが読書の真の楽しみでもある。しかし、これら14のサブテーマは、平和という広大なテーマを体系立てて考えていくための見取り図でもある。ぜひ参考にしていただきたい。きっと意外な発見もあるだろう。そしてこれに関連して本書では、個別のテキストについての論稿以外に、たとえば「『3.11』を考える」といったテーマで10の「コラム」を配置し、その個別テーマに沿った読書の道筋も示した。

また、本書で紹介されるのは、出版されたばかりの最新のテキストというより、そのほとんどがむしろ「古典」と呼ばれるべきものばかりである。もちろん、与えられたサブテーマを考えるために最良のテキストであると思われたものは、比較的新しいものも紹介されているが、本書は基本的に「古典」にこだわった。これが本書の第三の特長である。複雑かつ高度に移ろい易くなった現代世界では、日々新しい事物を追いかけなくてはうまく生きていけないような気もするが、逆に行き先を見失いつつある時代だからこそ、「古典」を再読することは私たちに大きな力を与えてくれる。過去の幾多の困難な時代に、先達たちが何をどのように経験し、思考してきたのかを振り返ることで、時代を経ても変わらない普遍的な課題に気がつくことができ、未来への光明を見出すことができるからである。

これら多くの「古典」を評した各執筆者たちは、いずれも各分野で大活躍をする一線の研究者たちばかりだが、彼らには、単にテキストを解説したり紹介したりするだけでなく、現在の地点からそのテキストの価値を再評価し、知的に格闘してほしいと依頼申し上げた。執筆者はその多くが、次代を担う比較的若い世代に属するが、彼らが学問を志したおそらくもっと若いころ、必死に格闘したであろう古典的なテキストに、今再び向き合ってほしいと頼んだのである。中には、自分を指導してくれた先生の著書を評することになった執筆者もいる。結局それが成功したのかどうかは、読者の判断にゆだねるしかないが、読者がそれ自体で読み応えのある文章に出会うことで、本書がテキストの内容を単に解説・紹介しただけのブックガイドではないことを理解していただけると思う。

本書は、1973年に誕生した日本平和学会が創立40周年を迎えるにあたって

企画された。それゆえ、その執筆者の総数を見てもわかるように、本書はいわば学会の総力をあげて取り組んだ成果でもある。学会として、後にも先にも、おそらくこの規模で書評集を編纂することはそれほど容易ではない。したがって本書は、平和学習者のためのブックガイドとしては、現時点でのいわば「決定版」であるとも言える。

本書で取り上げられたテキストは、個々の文末の「ファザー・リーディング」（今後関連して読むべき本の紹介）も含めると、100冊をゆうに超える。したがって、本書のタイトルは、末尾に「+ a」とつけた。しかし「+ a」には、もう一つの積極的な意味もある。

いうまでもなく、現代において「平和を考える」ために読むべきテキストは、星の数ほどある。紹介された本が100冊を超えたといっても、実はこれだけの数に絞り込むのも大変な作業であった。つまり、大切なことは、本書には読むべきだが紹介されていない本が無数にあるということである（たとえば、レフトルストイの『戦争と平和』やカール・フォン・クラウゼヴィッツの『戦争論』は、残念ながら取りあげられなかった）。したがって、本書はほんの最初のきっかけにすぎない。読者のみなさんは、本書をきっかけにして、「平和を考える」ための知的な歩みを始め、やがて長い旅の途中で自分独自の「+ a」を発見してほしい。個々の読者がテキストを読むという行為を通じて、やがてそれぞれの「平和研究」を創り出すことこそが、本書の最終的な願いである。

本書を読み進めていただければわかるように、現代において「平和を考える」とは、実は、現代世界で「どのようにより善く生きるか」という、さらに普遍的な問題を考えることにほかならない。本書は多数の論稿から成っているが、読者はそこに一貫して流れるメッセージも読みとってほしい。それは、平和というテーマが、単に評論や観察の対象ではなく、まさに今、私たちが生きる上でもっとも切実な問題であるということ、そして、個々の人間が、まさに当事者となってそれを「創り出す」ことによってのみ、平和は真に実現可能なものとなるということである。

編集責任者 佐々木 寛